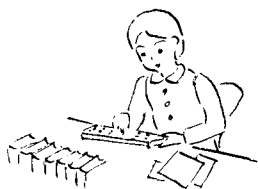
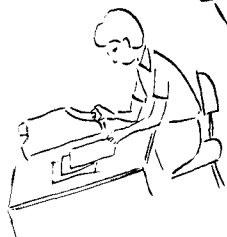
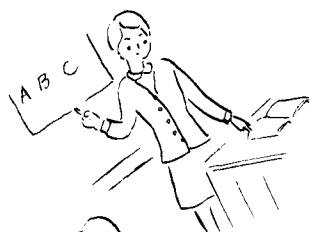


「わいふ」十周年記念特集②

母親が外で働くことについて



1905年
10月/119号

わ い ふ 119号 も く じ

—— 1973年10月号 ——

【テーマ原稿】

職業を持つ母親と共に	大村 輝子	3
母親が外で働くことについて	矢崎 好子	7
〃	亀山 利子	11
セミ・アルバイトあれこれ	小山ヤエ子	15
母親が外で働くことについて	高木由利子	19
母親が家で働くことについて	浜岡哥代子	22
母親が外で働くことについて	渡辺 富子	26
〃	土井 邦子	29
〃	山田よしみ	31

【これまでのテーマ原稿紹介】	32
----------------------	----

【文芸】

詩	篠原 広祐	25
●第10回記念集会とバザーへのおきそ其他		33
●編集後記		34
●会計報告		35

職業をもつ母親と共に

池田市 大村 輝子

その一

間に合うかな?と思ひながら団地の三階にあるその家まで急いでかけ上ると、扉の前の階段に座りこんで、目には涙を浮かべながら猛君は、私に来るのを待っていた。

「お帰りなさい。ごめんね。遅くなつて。」

うらめし氣に私を見つめていた猛君は、それでも来てくれたのでほっとしたのでしようか。ほんのり笑顔を返してくれた――。

これは、私が猛君を初めて預つた日の忘れられない思い出です。

42年の4月、わいふの仲間でもある西脇セツコさんの一人息子、猛君を預かることになった。

鍵っ子にしたいくないからとの西脇さんのお氣持で依頼されたのですが、私は子供が好きで、同じ団地内(神戸の多聞団地)のことでもあり、更には、御夫妻揃つて組合活動、地域活動と頑張つていらつしやるその姿勢を尊敬しておりましたので、一も二もなく引受けたのでした。

仕事としては、「お帰りなさい」と言う役目と宿題の相手等、一寸した母親代り、その他掃除、洗濯位でした。

西脇さんの手助けの部分は別として、ニセ母親の役目は、結果的にはどうだったのでしょうか。

私自身としては当時「お母さんごっこ」のお母さん役になり

切つていたわけですが、「おばちゃん」は、あくまで「おばちゃん」であつて母親の領域はその子にとつて侵しがたい存在でした。

例えば毎日見えていても、元氣で遊んでいるからと見過ごすような時、母親なら少しでも熱があることに氣付いたでしょう。又嫌われたら困るからと、厳しく注意しないでいると、五針も縫うほど、大怪我させてしまつたり、給食のない土曜日の昼食に、お母さんの味が出せなくて食を細めてしまつた等、数限りない失敗があつた事を思い出す。

尤も西脇さんは、家庭にいる私よりも、几帳面に家事をされる方で、私に負担が、かからないように細く心を配つて下さつたので、どうにかすごせましたけど、今考えると反省の多い日々でした。

現在猛君は中学一年生、逞しい立派な少年に成長していますが、これまでの苦勞は、現実に経験した者でなければ理解出来ないことでしょう。

猛君との付き合いは、主人の転勤で東京へ行くことになつたので結局、一、二年の二年間だけになりましたが、何と言つても預つた期間が、学童期に這入ると同時ですから、ある程度の個性も芽生えていて、私の影響よりもむしろ学校生活、友人関係の影響の方がより大きいと思われまふので、おばちゃんは、おばちゃんりの役割は果せたのではないかと、一応自負しています。

西脇さんのお話では、授乳期が一番大変であつたらしいのです。万全の体制を整えて職場に出ていても、わが子の事が氣にな

らない筈もなく、まして乳のみ児を置いて働く事は相当の覚悟が必要だったことでしょう。

多くの働く母親が、この時期に悩んだ末、やむを得ず退職してゆくのではないのでしょうか。

その二

さて猛君と別れて東京都東村山市に転居しましたが、そこでは教員夫妻の女の赤ちゃんを預ることになった。

御主人が高校、奥さんが小学校に勤務していて、まだお腹に赤ちゃんがいる頃から、適当な人を探しておられた。

見知らぬ土地の事、友人もなく唯御近所付き合い程度の方からの依頼ではありましたが、御夫妻揃っての真剣な話しぶりに心ひかれ、うちの息子と（一人っ子）兄弟のようにすごせたらとの思いもあって引受けたのでした。

もち前の子供好きと、世話好きの性分が二度も他人様の大事なお子を預ることになったわけですが、猛君と違ってその洋子ちゃんはお母さんの産休あけから冬休みをはさんで、生後約二カ月半位からわが家にやって来ました。とりわけ私の責任は重大でした。

生後間もない寒い日々、誰ともなしにひく風邪を貰って病院通いをした事。

腕白盛りの息子がベットの土上へのぼって、ハラハラさせられた事。

アイロンの余熱で、うっかり指先にやけどをさせてしまった事。

離乳食のヨーグルトサラダを、食べさせすぎて下痢させた事。

思い出せば又々失敗続きのセカンドママは、それでも日に日に大きくなる洋子ちゃんを見てると、実のわが子と代らない愛情が増して、可愛いさ故に気苦労も吹きとんでいました。

それでも一番大変だった事は、出産後の快復もよくないことであって、お母さん自身がよく風邪を引かれることであつた。

一度は高熱が続く重症の風邪になって、御主人が、洋子ちゃんとお母さん両方の看病で必死の姿も具に拝見しながら、共に働く事の大変さを、つくづく知らされたものでした。

この協力が無い限り女性が、結婚、出産後も引続いて働く事は不可能でしょう。

洋子ちゃんの御両親も、教組の役員をしていらつしやって、時々、時間がある時は教師をとりまく情勢等を話してくれたりして、当時の私にとっては唯一の社会の窓で、勉強の場でもありました。

ある時、テレビを見てると家永裁判の勝訴の報道があり、喜びの感激覚めやらぬ時、お父さんの早々のお迎えがあり、思わず

「勝つてよかったね」と私が言う

「本当ですね、でもまだまだこれからです。今夜、守る会の会合があります」と心からうれしそうでしたが、共通の社会を求めているお互いが、助け合えること、その事に私は喜びを見出したことでした。

しかし洋子ちゃんの場合も又主人の転勤で関西へ戻ることになつたので、一年半でお役に立たないまま、お別れして来ました。私にしてみれば、わが子同様の思いでしたし、洋子ちゃんも

私の方がいい時もあつたりして、よくなつてくれていたので辛い想ひでした。

後は、息子のお友達のお母さんでやはり子供好きの方にお願ひして引続き働いていらつしやいましたが、昨年春「色々考えた末、現在では最良の道だから」とママさん先生を廃業された。私は残念だと思いましたが、第二児を産みたいからとの希望もあつて、以前の大変さを知っているだけに無理からぬ事と、察した次第でした。

退職後、洋子ちゃんとお母さん二人で、わざわざ大阪まで会いに来てくれましたが、満九年の教員生活の疲れがまだ尾を引いていらつしやるようで、

「ゆつくりなさいよ」と、労うことでした。

後になって、東京へ電話し、

「奥様が家にいらつしやる御感想は？」と御主人に問うと、

「よくして貰つて、助かっています。」と言う返事が返つて来ました。

私には、正に実感だろうと受けとめられました。

結びに

職業をもつ母親と共に歩んだ二度の経験を踏まえて思う事は、お母さん自身が強固な意志をもつ事が前提であると思います。そして、

親子共に健康である事。

母親に代るべき適当な人がいる事。

保育料が払える位の給料がある事。

夫の理解、協力が得られる事。

働きやすい職場である事。
等が必要条件ではないでしょうか。

乳児を預ける保育所が皆無に等しい現体制の中で、出産後も引き続いて働ける職場は限られていて、西脇さんのように、公務員とか、洋子ちゃんのお母さんのように、教員とか男女差のない職種や、特殊な専門技能者位しかないのではないのでしょうか。

民間企業で働く場合は、利潤追求を第一とする以上、男女差は著しく男性の補助的な役割しか与えられていませんので、職場自体に魅力がある筈もなく、更に追い打ちかけて、結婚退職優遇その他、有形無形の追い出し作戦があるので、好むと好まざるに抱らず、退職を余儀なくされているのが現状でしょう。女性解放の夜明けとは、まだまだ遠い存在であるわけですが、かと言つて、今流行のパートは、よほど選んで行かねば、企業の景気調整の役目こそ果たしても、決して女性の地位を高めることは出来ません。

むしろ安く労働を売ることで、働き続ける同性のもしくは労働者全般の賃金を低めることにもなりかねませんから。

母親が外に出て働く場合、外的な妨げとしては以上の要因があるわけですが、内的な要因として身近に夫がいるのではないのでしょうか。

生活保障を夫の働きの上に頼っている私の場合は申すまでもなく、共に働き、共に疲れ、共に生活のための財を得ている夫婦であっても、家庭に帰れば主、従の関係になるのが日本人ではないのでしょうか。

子供は二人の子供なのに、大部分が、お母さんの方に責任がかかっているのではないでしようか。

進歩的なことを日頃発言し、活動している男性ですら、家庭に於いては、妻を献身的に働かせ「縦の物を横にもしない」のが、日本の典型的な男性であると私には思えます。

この事実が封建社会の名残りとして徐々に解消されてゆく過渡期の姿だとすれば喜ばしいことですが、なか／＼この根は深く、ましてや利潤追求の手足になって働く夫達の生活を考えてみれば、家庭での王様ぶりは、女のあわれさにも通じて、裏返しをあわれさに思いがめぐってくるわけです。

果たして多くの母親が生々と働ける時期が来るのでしょうか。どうでしょう。

最後に一番大切な母と子の問題があります。

先に矢崎さんが「母性迷信」の中で「神聖な母性を保持する責任が、すべて母親個人にあるなどという議論に、頭を下げては母性の状況はさらに悪くなる」と言われていましたが、母性を、押しつけられると反発したくはありますが、骨肉の愛はどうしようもなく、極限状態以外の母親なら、働きつゝも母性愛からはぬけきれないのが、普通の母親の姿でしょう。

その母性愛故に職を持ちたくない私であっても、社会的にも個人的にも女性を人間として尊重し、働きやすい場所を与えてくれるなら（受身では虫がよすぎるかしら）喜んで職場へ出て行きたいものです。

勿論その時には、子供も安心して預けられるような条件がなければなりません。

人の人間として、妻以外母親以外の何かでありたいとの願いは、多くの女性の望むところではないでしようか。しかしその願いも、子供をとりまく状況の悪化に又々母親の職場進出を妨げる要因となっています。

主人は会社で粉々に働かされ、子供は、つめ込み教育に追いやられ、食べる物はと言えば、公害で毒されている現実に「ああやはり私は働かずに、家庭をしつかり守っておきましょう。家族の生命を守るために」との結論に達するのです。しかし、家庭にあつても諸々の障害、矛盾は、働く婦人と同様に火の粉はかゝっているのですから、共に手を携えて向わねば、女性の存在は時代を逆行する恐れがあります。その事が女性のみならず男性をも例外ではなくかわってくる社会であつてみれば、人間として、人間らしく生きるためには、だれ、かれの問題ではすまされません。

40才の峠を迎えて、生きることとは何かを、最近とくに、自分に問うています。

やはり夫と共に、心やすらかに送れる老後でありたいし、と同時に、一回きりの女を生きる生き方に、女性史という川の流れのはんの一雫ではあつてみても、少くとも前へ向わせる役割にはなりたいたいものと念ずる事しきりです。

母親が外で働くことについて

東京都 矢崎 好子

私はこの問題は、まずできるだけ広い視野でみるのが必要だと思っています。さもないと感情論になるのです。働いている女性性は、家にいる女性をいくじがないとか、能力がないとかいろいろ目で見がちであり、あべこべに働いていない方は、働く人の家事や育児のあらさがしをしがちな現実があります。これは問題を個人の次元で、せまく見るからなので、こういう論争は不毛であり、女性全体にとって有害です。以前わいふに原稿を書くというので、主人にたずねました。

「女性が始めて工業労働者として、働きはじめたころの事情というのは、何を読んだらわかる？」

「それなら資本論第一巻を読みなさい。」

いつもいうように私は教育がないから、筋の立った読書をしていないし、あまり専門的なものも歯がたちません。資本論はもとより読んだことがない。そこでおそろおそろ、主人の資本論をとり下ろしていかげんにパツとページをあけたところ、

「女性に従順温和であるから……」

という文字が目にとび込んできました。そのときのへんな気持……「失礼ですが後のジツパーが開いていますよ」と人から小声で注意されたときのような、気はすかしい違和感……背中がくすぐったくなったのは自分でもなぜか分らなかったけれども、

すぐそのあたりを読んでみると、婦人労働者は柔順温和であるから、それにつけ入られて賃金を切り下げられたり、罷免されたりする、それでも抵抗できず、おとなしく引き下がるという話なのです。一段落読んで、私は「気はすかしい感じ」の正体が分りました。

「あなた。マルクスってやっぱり前世紀の人ね。だってここに、『女性は柔順温和である。』って書いてあるんだもの。現在こんな定義を誰がするでしょう!」

女性は柔順温和といい切る男性が今やどこにいるだろうか。

私は年久しく、柔順温和という言葉聞いたことすらありませんでした。「あなたは女性である。女性は柔順温和である」といわれたように感じ? 顔があつくなり、こそばゆくなった私。

主人は一瞬、あつけにとられたように私を見ましたが、意味をさとして苦笑し、

「なぜかわしいことですな……」

「あらどうして? 社会は進歩したのだから。」

柔順温和でない私は逆襲しました。

「マルクスは柔順温和がいっていつてゐるんじゃないのよ、当然のことだけど。柔順温和だから賃金を切り下げられる。柔順温和につけ入るやり方を非難しているんだけど、それを裏返せば、女性は柔順温和でなければならぬ、ということでしょう。あなたを定義すれば、とにかくにもマルキストなのだから、女が柔順でなくなったといって、なげくのはおかしいじゃないの?」

主人は非常に口の達者な人で、私をやりこめるのは簡単なの

ですが、このときは社会の大勢のおもむくところ、抗しがたいと思つたのか、にやにや笑つただけで何もいいませんでした。

この場合、私は社会的に視野を広げて柔順温和でなくなった女性というものを見、主人は男性として個人的立場から見たのです。

私はつねづね主人に申します……。

「資本主義社会は実質的には一夫多妻の社会だから、男が妻以外の女性と親しくなることは防げないわ。男は自由であり、女は自由でないわ。」

「ふん。」

「男の浮気には社会も寛容だし、経済力も優位にあるのだから、当然のことよ。だから私はあなたが浮気しても、たいして文句はいわないわよ。」

「ふん。」

「そうね。引つ搔いて喰いつくわ。それ以上のことはしないつもりよ。」

「それ以上のことって？」

「慰謝料をとるとか、離婚をするとか、毎日のようにあなたを責めるとか、そんなことはしないの。」

「引つ搔かれて喰いつかれればたくさんだ！」

「でも、それくらいいいじゃない？ 私はもちろん、男女とも貞操に対して負う義務は、平等であるべきだと思つてゐるのよ。けれども、あなた個人の浮気を責めたところで、それは平等にはならないでしょ。社会制度の改革、女性の地位の向上がなければだめでしょう。私はあなたとけんかするエネルギー

を、女性解放のために使うつもりよ。」

これも私は広い視野で「男の浮気」を見、主人は妻君に引つかかれたり喰いつかれたりするという、個人的被害の面から見ているのです。実をいうと、こういう広い視野でのものの見方を、私に教えたのは主人なのです。そこで私がしばしばそれを使って、彼をからかうのです。

シーザーよ、クレオパトラに用心せよ。女を教育すれば、ろくなことはない、というのは、バーナード・ショウの「シーザーとクレオパトラ」のテーマでした。幸徳秋水は菅野スガ子を教育して、その結果天皇の暗殺を決意した彼女のまきぞえを食い、殺されてしまいました。うちの主人もよほど警戒したほうがよさそうです。

が……「母親が働くことについて」というテーマには、私はぜひとも視野を広げたものの見方……個人的被害、加害の立場からではない、見方をするを提案いたします。

さて私は、アンケートに応じませんでした。これは引越したの、全P研の大会だのという騒動続きで、忘れてしまったのです。その設問をいまよみ返してみますと、

○全部の人に対する共通質問

というのの最後に、

○女性の自立は経済的裏付けがなければあり得ないとよくいわれますが、あなたはそのことをどう思われますか。

皆さんのお答えを読んでもみますと、どうもこれを個人的次元で解釈して……働いている女性即ち自立している……私は働い

ていない……即ち自立していない……あるいはその逆……といった考え方が目立ちます。その前の設問も、
○あなたは自立していると思いますか。

とあって、自立ということを「あなた」という個人の問題として扱っている。

私はこの行き方では必ず壁にぶつかったり、足の引っぱりあいをしたり、ということになると思います。

経済的裏付けがなければ自立がないというのを、あなたのこ
とではなく、女性全体のこととして把えてみて下さい。

むかし女性には財産権がなかったので、たとえ、お金を持って（親にもらって）嫁いでも、そのお金は夫のものとなりました。少くとも管理権は夫にありました。平安時代の上流女性のように、財産権はあっても、管理する能力を教育によってなくされてしまうので、管理に有能な夫を持たないと、それを失ってしまうというような場合もあります。

しかし近代以後、女性が「賃金」を得、経済組織の中に組み入れられますと、彼女自身の労働を売って、受け取った賃金が彼女のものでないとは、とても強弁できない情勢となった。その上、近代の経済組織、資本主義は、女性の労働を必要とする方向に、つまり男だけでは維持できないほど、大きなものになつていったのです。その仕事の質も、女性に荷^おい得るものがたくさんありました。

このごろの職業を考えてごらん下さい。腕力が必要とするものは非常に少いことにお気付きでしょう。それよりも頭の働きや、注意力を必要とするものが圧倒的に多い。女は男より、腕

力は劣りますので、昔の機械化されない農業を女だけでやることはむづかしいし、戦争する能力などはあまりありません。敵ととつくりあつて、相手の首を切るのはむりです。

しかし近代以後の機械化された社会では、女性のやれる仕事は無数にできてきました。

私はこういう事情が、女性の地位の向上、自立をもたらしたのだと思います。

まず財産権を得、自分の収入は自分のものとなり、自由意志で結婚できるようになりました。次に教育を受ける機会を、男と同様に与えられ、職業の範囲はさらに広まりました。

なにしろちゃんと社会の組織の中に入って働いている女を、お前さんは一人の人間ではない（半人前だ）ということとはとてもむづかしいので、それを自覚した女が要求をつきつけてくる
と、認めざるを得ないわけです。一人の人間と認めてしまえば、自分で結婚をきめることや、男と同じ教育を受けることも、芋づる式に出てくる。

こうして女性はいりじりと自分たちの権利を拡張し、一人の独立した人間になろうとしたのです。

西欧諸国でも、女が男と同等の権利を与えられるようになってのは、第二次大戦以後であるようです。私たちがふつう思うほど、あちらが進んでいるわけではありませんが、ただむこうは、天下りに突然解放された日本女性と違い、長い運動と準備の期間がありました。それでもアメリカにウーマン・リブの運動がおこるように、まだ不平等は存在しています。現在法律的には平等であっても、社会的に平等でないのが問題になつてい

るわけですが、男権社会は男に都合がよいように運営されてお
り、女がもつぱら自分をそれに適応させようとする、むりが
いく。母性を持ちながら男と同じだけ働こうとすれば、育児は
なおざりにせざるを得ません。家事が女の役割になっていた
社会で、男と同じ時間働けば、労働過重なのは知れきっています。
これはむしろ、女を働かせるなら、女に都合のよい社会運営を
するほかないでしょう。

あまり記憶がたしかでないけれども、チエコでは午後二時に
会社や工場がひける。それは婦人の要求によるものだというこ
とです。たしかに二時に終れば、ゆつくり買物などして帰って、
夕食の仕度もあわただしくないし、子どもとの接触時間も長い
でしょう。同じ保育園に預けるにしても、朝八時に預けて、夕
方六時にむかえにいくとなると、帰ってごたごた母親が立ち働
いているうちに、子どもはねむくなつてしまいます。二時〜三
時につれもどせば、ずつとよいだろうと思います。もちろん朝
の始業は早い（六時か七時でしょう）にしても、昼食に会社、
学校の給食があれば、かなり余裕をもって生活できるのではな
いか。またお隣の中国では、既製品のおかずが大はやりのよ
し、衣服のつくろい屋というのものもあるそうです。こういう細かい
ことが大事なので、女性に都合のよい社会運営をということが、
これから女性解放のプログラムに、のぼってくるのではないで
しょうか。

このようにして、女は男が飼っている美しいペットではなく、
社会を支える一員であるということを自ら証明するのです。そ
のために欠くことのできない要件が、社会組織の中に入って「

働く」ことなのです。

女性の自立というのは、こういうことを指すのであって「あ
なた」が働いているから自立しているとか、働いていないから
自立していないとかいうことは、少し別の問題なのです。ご
く少数の女性が、個人として自立していても、女性が自立して
いるとはいえないでしょう。その逆を考えてみて下されば、お
分りになると思います。

で、現在女性は半自立の状態にあります。解決すべき問題は
たくさんあります。ことに女性が母性を持っているために、男
より能力が低いとみられていることは大問題です。女性の解放
と自立のためには、社会がもっと、女を中心に運営されなくて
はなりません。保育園さえ作ればよいということではない。そ
うなればもっと多くの女性が社会組織に参加してきて、解放と
自立は一步進むでしょう。

ただし歴史の歩みはきわめて巨大なので、短兵急にことを考
えれば、挫折を味わうことになります。現在働いていないから
自立していないなどと、せまい簡を起さずに、たとえばあな
たがパート・タイマーとして、一時間働けば一時間だけ女性解
放に寄与したことになるし、女の子を女以外の何かになれるよ
うに（結婚だけが職業でないように）育てたとすれば、その仕
事を以て女性の自立を進めたことになる。市民運動への参加も
このような社会民主化の進展が、女性の進出を促すことにな
る。多くの人が、あの手この手で少しづつの力を合わせて押し
まくるうちに、巨大な歴史も、ついにはその歩みを進めるので
す。

むりをせず、ゆつくりやること……けっして自分一人でも何か成果があげられると思わないこと……足を引っぱり合わず、団結と協調を重んずること。

これが私の提案です。

母親が外で働くことについて

東京都 亀山利子

私は、自分について、「母親が外で働いている」というふう
に、意識したことがない。一人の人間である私が、働いている
うちに年令をかさね、結婚しているうちに子どもが出現し、仕
事からはなれて家に帰れば、私の性は女だから、「父親」とは
呼ばれずに「母親」と呼ばれ——それだけの話だと思ってい
る。

ここに一人の男がいて、やがて結婚したいとねがう女性にめ
ぐりあった時、また一人ずつわが子が誕生するたびに、深刻に
頭をかかえて、仕事をやめるべきかどうか迷っている——と
いう話をきけば、人はまずそのこっけいさを笑うだろう。ここ
に一人の女がいても、話は同じはずである。年を経て、父親と
か母親とか呼ばれるようになった人間が、家族生活のほかに、
仕事の生活をもつのは、あたりまえのことだと、私は考える。

もう九年近い前になるが、子どもが生まれてはじめての正月、
年賀状に、「妻・母・教員と一人三役で大忙し」と書いたこと
を思い出して、今の私は苦笑する。これからは、男性も、第一

子の誕生の年には、「夫・父・会社員と一人三役で大はりきり」とメッセージを送ってもらおうではないか。

かといつて、このけわしい世に、子持ちの女が働きつづける
のは、それほどなまやさしいこととは思っていない。私の「理
念」ではあたりまえであつても、「現実」はまだそれをあたり
まえとしていないから、うらめしくも、「仕事と育児の両立」
のためには、少なからぬエネルギーをついやしてきた（日々の
段どり、保育所づくり、学童クラブづくりなど。数年前のわい
ふに、オカーチャンノオシゴトという文を書いた覚えもある）。
「特別」であり、「例外」であり、「わがま、」であるとされ
ることもまた、多かつた。

*

いつ頃だったか、いろいろな思いめぐらしてみるのが、多
分、大学に通っている頃、私は、「生まれてくるのが百年ほど
早すぎた」ことに気づいている。女が、結婚か仕事かという二
者択一を迫られることなく、あたりまえのこととして、仕事も
愛情も育児も、楽に両立させて、生をたんのうして生き抜く時
代は、まだ来ていなかった、百年ほど早く生まれてきたばかり
に、なにかをえらび、なにかを捨てなければならぬだろう。な
にかを捨てたさびしさは、これは歴史のさびしさである。歴史
の過渡期に生まれてきたのが、運のつきであつた。

実際に子どもを持ったのは、この悟りからなん年もあとのこ
とになる。

私の中には、あきらめのよさと、途方もない欲張りとは共存

している。「母親になった」ということで、自分の行動半径を小さくしてしまうのはいやだったし、むしろ母親だからこそ一層、みずみずしく生きてゆきたかった。子どもを犠牲にするのはいやだが、子どもも子持ちの女も、両方育つという道を追求したかった。

月みちて生まれ出てきた小さな男の子を抱いた時から、世にいう「仕事と育児の両立」がはじまった。途方に暮れたり、涙をこぼしたりしたこともあったが、無認可の共同保育所で出会った働く女たちとの、育児の七人八脚（二人三脚ならぬ）と、自立している亭主と、子ども自身のもつ生命力とに助けられて、今日までの日は過ぎた。

家計を平等に担っている男と女の間生まれた子どもなのに、女の方だけが一方的に行動の自由の束縛を受けるのは、これは夫婦の間の矛盾ではなくて、歴史の矛盾、社会のありようの矛盾だと思う。仮に、男と女が、子守りの負担を平等に半分ずつにしたからといって、解決できる問題ではないのだから。しかし、現実には、目の前の亭主にむかって要求したくなり、思うように担ってくれない相手にいらいらし、夫婦げんかがはじまるのがおちである。名古屋での、育児の七人八脚のおかげで、私は、亭主を子守りの補助者と見なしたい気持ちから解放されることができた。だから、たまに引き受けてくれれば、後光がさして見えるほどにありがたい。

名古屋でも、ここ小金井でも、働いている女親同士の助け合いが、心強い支えである。

*

自分の身のまわりの世話一切を、女房がいなくても自分でできる亭主を、私は、「自立している亭主」と名付けたい。女房が家にいて、してくれた方がいかにきまっているが、留守にされても、そう苦痛でなしに、被害者意識なしに、最低の衣食の要求がみだせる男。最低の身のまわりの始末を自分でつける能力は、人間としてあたりまえのことである。女の自立には経済力が求められるように、男も、この能力をもってはじめて、自立する。料理上手は、花嫁さんのだけでなく、花むこさんの商品価値でもある。

*

私の場合、精神の自立と経済の自立は切りはなせない。働けなくなるような病気は別として、もしも私自身の収入がなくなれば、私は、自分の精神の自由そのものがなくなつたような気がして、やがて酸素不足の金魚のように、パクパクと苦しみはじめるだろう。少なくとも、自分一人は暮してゆけるだけの収入を、自分が確保していないと、呼吸も楽にできないくらい、私は自分の経済力にこだわっている。多分、中学や高校の頃に、「経済的独立なしには、精神的自由がない」ことをつくづく思い知ったことがあって、すでにそれが皮膚感覚にまでなつてしまっているのだろう。

口ばしも黄色く、まだはえそろわない羽をばたつかせて、自立をあせっていた意地っ張りな小娘は、ロマン・ロランの「魅せられたる魂」のはじめの方、アネットとロジェの訣別の場面

*

私は、兄二人、弟二人という、男きょうだいばかりの中で育った。子どものころから、私の将来を「女だから」とかつこでくくったことは一度もない。生きるとは、自分でエサ代を稼ぐことだと思っていた。女一人だから、よく家事の手伝いをさせられたから、一人の男のために家事をになうことが、男への愛の表現であるという夢を抱くひまもなかった。

兄弟だからいつの間にか視野に入ってきてしまう兄達を、人生を一步先に歩いている奴、というふうに尊敬の念で見ている、年のはなれた小さい弟たちからは（出生から記憶している）、子どもの育ってゆく生命力と、育児の仕事の際限なさとを知った。

おむつを変えたり、洗ったり、離乳食をうらごしでつくったりするのはベテラン（？）で、だから、三人目の弟を抱きとるような気持で、自分の息子と対面した。とりあえず一人の小さな生命を育てることのために、私の仕事と経済力をすてる気にはなれなかったし、私の収入がなければ暮していけなかったのだから、ほこらしい共働きであった。

出産と育児にふさわしい年令が、仕事を意欲的にやれる年令でもあることは、女にとって残酷である。中年になつての再就職が簡単にできると思うほど世の中を信じられなかったし、仕事の世界をもたずに、いい中年（？）になれるほど、自分に自信ができていなかった。

*

「そんな考えでいたら、絶対に、子どもは不良になるぞ」といわれて、ほろほろと泣いたことがなん度もある。私だって、息子がすくすくと育ってほしいとねがっているにきまっている。

私も、男のように、専用の家事奉仕者である女房がほしかったし、アラジンのランプにあこがれたことがある。しかし考えてみれば、男はアラジンのランプを所有している。「めし！」といえど、食事が食卓にととのうし、「ビール！」といえど、ビールが目の前にあらわれる。女だつてほんとうはたまには、「腹へった、めし！」と云つてみたいし、ちよつと家に電話して、「友達を二、三人連れてくから、飲みものとつまみの用意たのむ！」と伴侶に云つてみたいのではなからうか？ 私男になつて、女房に子どもを八人ほど産ませて育てさせておいて、仕事がいりちよつとイッパイひっかけて、いい気持で家に帰り、大きい方から順番に、ドシラソファミレドと頭をたいてみたいし、寝顔のほつぺを小さい順に、ドレミファソラシドとつづいてみたい。

*

話は少しそれるのだが、最近つくづく考えていることがある。この夏、一週間ほど、兄一家とともに暮すチャンスがあった。兄は、いくつかの職業遍歴のあと、今のところ、せつせと翻訳をしている。情熱的でこり性で、というときこえがよいが、ねちっこくて偏執といえるほどに、なにもものかに没頭できる兄は、ひまさえあれば、洋書と原稿用紙にかじりついている。仕事にのつていれば、食事ときでも呼んでもこないし、食べおわれれば、磁石に引かれるように、すーっとまた本にもどる。朝、目覚めれば、さわやかな頭でまず机にむかうし、気分転換の家庭マージャンの前後でさえ、なにごとともなかったようにこつこつと書きものをつづけている。大学に籍をおいているから、月給で家

族の生活を保証したあとは、たてのものを横にもせず、文字通り仕事三昧である。そういう兄に義姉は惚れこんでいるからせつせと家事にはげみ、じょうずに子どもを育てている。子どもらは、パパもママも大好きで、尊敬していて、この家庭はバランスがとれている。

兄妹だから、私にも、この兄と似た資質がある。この四、五年、自分でそう思うようになってきた。気狂いじみた執着心がある。読んだり、書いたり、考えたり、まとめはじめると、時間を忘れ、没頭してしまつていつまでもやめられない。

しかし、私は妻だから、母だから、兄のようにはふるまえない。朝起きれば食事の心配をするし、食べ終ればあとかたづけをする。家にいるあいだじゅう、黙々と仕事に没頭しているわけにはいかず、亭主や子どもと会話をかわす。とくに子どもとの会話は大事にしている。亭主や子どもがきらいなわけではない。大事な家族である。

誰にもわずらわされずに、自分自身の集中した長時間がほしければ、家族がねしずつ真夜中から夜明けまでしかない。それをすれば、今度は体調がガタガタになる。

なにもかもほおりだして、集中したい対象や情熱があるのに、男なら変り者ですむのに、結婚した女はそうはいかない。熱中している兄の横顔やうしろ姿を見つめながら、私は、ねたましいほどに、うらやましかつた。仕事に必要な旅行でも、「行ってくる」と、ひとこと通告すれば、それで終りだ。

思わずついたため息を、もしも兄が聞きとったにしても、この想いはわかるまい。兄は、男だから。

「女が野心をもたなければ、家庭は平和なのだ」——この頃、

自嘲して、そう思う時がよくある。

女である私は、結婚しなければよかったのか。（結婚する時、仕事をやめようとしないうちに私にむかつて、姑は、内助の功に徹することのできない女は、結婚しない方がいい、と云つた。孫を無事に育てたので、今は、充分理解してもらっているが。）

子どもを産みおとさなければよかったのか。

答は、どちらもノーである。それどころか、弟か妹を一人か二人、与えてやりたいとさえ思っている。

もっと早く、自分の資質や好みに目覚めればよかったのか。生活設計をもっと工夫すれば、この解決の道はあるのか。

*

女とは、ずいぶん、余分なことを考えなければならぬものである。私は、自分が女であることがとても好きだが、こう思う時だけ、とても男がうらやましい。

「壁の薄さがうらめしい」（ピアニストとしての自分の練習の音は、作曲に没頭する夫シューマンの妨げになる）と度々日記に書きしるしたという、クララの叫びは、他人事とは思えない。

*

女が仕事をもつのはあたりまえ、ということでの文を書き出したが、いつの間にか、今迷っていることにたどりついてしまった。

セミ・アルバイトあれこれ

池田市 小山ヤエ子

主婦は朝起きてから家族をそれぞれに送りだすまでがあわただしい。私もその例に洩れないのだけれど、特に火曜と金曜のこの時間帯はやたらとせわしない。

週二回、アルバイトに出かける日にあたるからだ。

まずは、下ごしらえはしてあるものの夫、息子、自分のと三つのお弁当をつめる。昨夜十二時前に食事を取った夫には軽いパン食を、食べ盛りの中学生の息子は朝っぱらからラーメンとかスパゲティを欲しがる。

「パンにしといてくれる？」と頼めば、しぶしぶでも我慢するのだが、「面倒やからパンにしときなさいよ」と、命令すれば、「腹へって早弁してみつかたって知らんぞ」と、おどかさ。ここいらへんの駆引きがややつこしい。

自分は欲しくないから、たいいてい牛乳を立ったままきゅっと飲み、果物を二切れ三切れつまんでおしまい。

「はよ、してよう、はよう起きてえ。ついでにおふとん全部あげといてえ」

せわしげにお菜箸を動かしながら「はよ、はよ」を連発する。今日は誰もいなくなると、気配で察した手のリインコの黒助と河童が、肩にしがみついて離れないのを無理になだめて籠に入れ八時三十分に鍵をかける。

赤ちゃんを着替えさせ、ミルクを飲ませ、おしめを換えてやり、お兄ちゃんかお姉ちゃんをせきたてながら保育所へかけこむ共働きの若いお母さんの大変さは神業なみだと感じ入るのはこの時である。

一分の無駄もない。何分の電車のどの車輛に乗り、梅田の地下街を何分でつっきり、青信号に切り替わる頃合いまでのみこんでいて歩巾を調節している。九時三十分かっきりにはT広告代理店にすべりこむ。これがこ一年近く続いている。

長年行きつ戻りつだった体の状態もだいぶ良くなり、自信が出来かけた時、趣味や地域の活動だけで満足でなくなっている自分のところをみつけていた。

「好きなもの買ってらっしゃい」と、寝たきりで息子に夕食の買物を頼んでいた頃のこと。はじめはハムだとかコロツケだとかばかり買ってきたのが、ある日、トマト、胡瓜、レタスと野菜だけを下げて帰ってきた。「こんな食べたいねん」と、野菜不足の息子が訴える言葉に調理してやれぬもどかしさで胸がつまった。それだから、家事全般を自分でとりしきれる様に回復した時は、おやつ作りでこねる粉の手ざわりに、真白に冴えてはためく洗濯物の音に胸がおどりと満足し切っていた。

ところが、そんな時期は長く続かない。

若い頃と違って体力、時間ともに家事に協力して貰う事が許されなくなっている夫。クラブ活動でへとへとになって暗くなって帰る息子には小学生の時のように「ちよっと、お使い」を頼めない。

自分の体力、長年不自由をかけた家族へしわよせが行かぬこと、今までし續けて来た趣味だとか仲間との集りを犠牲にせず出来る範囲の仕事、いろいろと虫のよい条件を考え合せた上で、手をだしたのがこのT広告代理店だったという次第。

最初、慣れない広告専門用語がばんばん飛びだしてくる電話の応待に神経を疲れさせ、原稿整理の文字の大小の配分にとまどって書き損じてばかりいたのが、この頃では電話送稿をペンを片手に受けられるようになってきた。

「はい、どうぞ。上から倍半の大ききです、横に左から右へ振ってその次、下へ行間に一角。次に半角あけてパーレンとじ……云々。最後にしづくで終りですね。はい、たしかに」家内で家事をこなして行く手順とは別の能力、一つの仕事を相手の出方に合せながらさばいて行く緊張感が、責任は伴うがある意味で心地よい。こうした事務処理のカンみたいなものは割合と早くとり戻せたものの、今もってふつ切れない事柄がある。

来客が席を立つとすぐにソファアの乱れを直し、灰皿を始末したくなる。誰かがマツチを捜していると、聞かれもしないのについて手渡ししてしまっている。人の使っている鉛筆でも丸くなくっていると削りたくて仕方がない。

おせっかいのサービス過剰だ。

十何年かの家庭での主婦としてのこころくばりが、事務所でも尾を引きづってしまっているのだ。

契約を結んだ四時三十分の退社時間になっても、連絡事項が残っているのに、外へ出たまま誰も帰って来ないとい、「困

るだろうな」が先に立って帰れない。

大手の銀行で終業ベルが鳴ると同時に、ともかく一度席を立つ運動が組合の提唱で実行されていると聞くのに。

一人だけで事務所のする番をしている時は、トイレの行き帰りが駆け足になっている。電話のベルが気になるのだ。

日頃、働くものの権利だとか、新しい婦人像だとか偉そうな口を叩いていた筈なのに、働くものの端くれとしての権利意識の低さを自分の中にみつめて、こんな筈でなかったのにと、がつくりする。

「私がちよつとゆづればいい」式の主婦的発想に染まってしまうのを感じず。或いは私達の年代に共通するビジネスライクに物事を割り切る訓練のなさからきているのかも知れない。

この五階建の古ぼけたビルの中には小さな会社が二十近くも同居している。同じフロアのO・L達ともお茶場で出くわすのだが、奥さん連中相手のおしやべりに馴れてしまった身には、どうも調子があいかなる。私が一番仲のいいのは、隣室のおじいさん。

「今日はお月見ですなあ」「晴れるといいですねえ」

「お茶の葉も高くなりましたねえ」「年寄りはいいい茶を飲むのが楽しみなのに、かないませんわ」

やれやれ、ヤングよりもオールドとの相槌の方がしっくり行くとは、と苦笑する。

職場での男女の賃金差や、女性の年令制限や、仕事の内容やらと、働く婦人のひつかかっている問題は数多いんだろうけれ

ど、そんな大きな事柄でなく、ほんの些細な日常のあれこれの中で私が感じた男と女の違いを二つ三つ。

雨降りだった日の翌朝、まぶしいお日様がばあーと顔をだした時の出勤途中のうらめしきがある。

「たまった洗濯したいなあ」

電車の窓から青空を見ていると、日の光がもつたいなくて大損したみたいな気になって困る。

こんな想いを絶対に男の人はしない。絶対に。

夕方のラッシュでこつたがえす雑沓で何年振りかに古い友達とすれ違った。

「いやあ、あい変らずがんばってるんやねえ」

ずっと働きつづけてきた彼女は化粧粧っ気のない顔をほころばす。

「今から下の子、おばあちゃんとかへ取りに行くの」

「電話ちょうだいね。ゆっくり話したいから」

今、会っていないが「電話くれ」もないもんだと、おかしがるが、現実はそのままサヨナラと急ぎ足で右と左へ。

これが亭主族なら共働きであつたとしても、数年振りに会つた旧友同志がこう簡単に諦めるわけがない。

「ちよっと一杯」「まあお茶でも」といった調子で、二、三時間はまたたき間に過ぎるはず。

帰りの電車の中。この頃はミスとヤングミセスとの区別がつかないと言われているが、見分ける方法がある。小さなバッグの他にふくらんだ買物袋を下げ、席にかけられるとすぐに目を閉じる人種は、例え膝上何センチだろうとブルージンだろうと

まず共働きミセスと見て間違いない。若者は本を読まなくなつたというが、たまに寄る大きな本屋は勤め帰りのヤング達があふれているし、電車の中での娘さん達はたいてい立つたままで文庫本等を読んでいる。案外な発見だ。男性は夕刊か雑誌を開いている人が圧倒的に多い。家にたどりつくやいなや開始される夕食作りに備えて、共働きミセスは活字よりいぬむりを選ぶ。

こうしてみると、働く母親にとつての家事、育児の比重は、男性にくらべてどんなに大きいかが今さらのように感じられる。育児への気くばりはともかく、夕食づくりより解放されたら働く母親はどんなに助かるだろうにと思う。

帰ってからちよっと手を加えるだけだすむ、安くて美味しい良心的な惣菜屋さんがさしあたりは増えればいいのにとと思う。

ざっざつと足音が聞こえるような整然とした流れにのつて前へ前へと進んで行くラッシュ時の人の波。脇目もふらず、行き先へ向つて黙々と動いて行く男女の群の中に加わっていると、変な気分になる。

「これが、いわゆる労働者なんだな」と、いったような。

資本も生産手段も耕す土地も持たず、自分の労働力を売って賃金に換えるしかない人種。そのために流れ動いている人の川。エリートサラリーマンであろうと労働力の切り売りには変りない。こんなあたり前の事が実感となる。サラリーマンは損だ。

自分の労働力に対する正当な賃金を貰えず、税金は否応なくばつちりと差し引かれてしまう。

私の通っているような小さな事務所でも経営者の取り分は所

詮使われている人とは較べ物にならない。経営者にはそれ相当の苦勞があるにせよ、その差は大きすぎる。税金にしても必要経費として落せる部分がだいぶあるし、使う者と使われる者との間のさまざまなからくりにもやもやする。

一体パートの時間給の基準などというのは、どこで決められてしまったんだろうか。雇う者と雇われる者の利害がどこかで噛み合つて契約が成り立っているのだから、保証もなく仲間もない、しがないパートの身にとっては、その場その場では責任を持った仕事ができても、働く者としての自覚が芽生えにくいように思う。そんな余けいな自覚など、経営者はパートに求めてはいないだろうけど。

仕事にでた日は、食べることにしかかわる家事以外には手をつけないので、翌日は掃除、洗濯、買物、雑用でつぶれる。

その次の日は、たいい地域の活動が待っている。

「公立高校が少ない。どうにかせなあかん」

「洗剤公害のひどさを訴えなあかん」

「共同購入して、ちよつとでも安い物品を」

こんなやあんなの活動は、本を読んだり遊んだりすることにくらべて面白くないし、しんどさが先に立つてさばりたくなることもしばしばだが、でもやっぱり出かけて行く。

新聞に載つた北海道の出稼ぎ村での鉄砲水のむごさに心が痛んだ時、お米一握りカンパ運動を知らせてくれるグループ。

物価の値上げに何とも腹の立つ時、反対の署名用紙が届けられてくると、やつこらさと腰を上げざるを得ない「テコ」の作用をしてくれる。

見て聞いて知つたことに自分だけでむしゃくしゃしているのではなく、實際行動に移せる場があるということ、その窓口を持つていることが私を安心させる。

動いた結果が、果してどんな効果や波紋をおこしているのだろうと心細くなる日があつたとしても、「しないよりはまし」と自分を納得さす。

その仲間達とのつながりや家事の合い間には、近くに住む年老いた母を尋ねたり、遊びに出たりと、こちゃこちゃはさまると、やっぱり一週間がびっちり忙しい。

家に落ち着けない日が三、四日も続くと、きまつて目が窪み、背すじがはって痛みだし目付きが意地悪げに尖ってくる。

「健、開けたあとは閉めなさい!! 何べんおんなじこと言わすのよ!!——テストどうやったの」

整理ダンスから下着が舌を出しているのと、テストとがどんな関係にあるのか自分でも判断しがたい。

「お父さん、いい加減にしてお風呂へ入って!!」

ヒステリー来襲だ。

「ねろ、ねろ」

「もうそろそろや、とおもてた」

大・中二人の男どもは迷惑げにいと冷たい。

早々におふとんにもぐりこみ「今週はこれにて一件落着、明日はずるけデー」ときめ、調子にのつて体力以上のことをしたがる自分に釘をさす。

「あああ、私はやっぱりあかんたれや。ほんとの自立とは経済的な裏付けがないとだめやと、わいふ」のアンケートにも書

いたくせにこの有様や。何もかも振りすて、本気で仕事がしてみたいと思いつめる日があつても、ちよつとした親孝行も、自己満足の地域活動も、お小遣い稼ぎも、昼ねも、おまけに梅干やらつきよう漬けまでもこれも私から切れることは無理やと、しがみついて、結局は、いつも中途半端。いつまでたつても中ぶらりん。夢想するだけはウーマン・リヴなみに自由奔放になれるくせに、現実はいじまりした主婦以外の何者でもない」

疲れていると、気までしゅんとしてきて、ぶつづつ呟いているうちに愚痴ねいりしてしまう。

翌日は最低の家事だけにとどめ、朝からねっころがつてテレビを見、井戸端会議にもちよいと口をだし、ペランダの植木にも丁寧な水をやる。

こんな日を二日も持つと、また体中の血がトクトクと新しく流れます。そして、懲りもせず「はよ、しよう」が始まる。

(おわり)



母親が外で働くことについて

宝塚市 高木 由利子

母親が外で働くことについて——このテーマの特に強調される所は、母親がという個所である事は誰もが認める所でしよう。これを母親の代りに「男性が……」では全く意味はありませんし、又「女が……」「妻が……」としても、このテーマの持つ意味は半減してしまうでしょう。独身の女性が仕事を持つ事は今の世の中ではほとんど当り前のことですし、妻と一口に言つても、子供のあるなしでは大変な違いです。かりに子供のない夫婦が、共働きをする場合には、多少妻の方に家事の負担はかかるでしょうが、私の過去の経験からすれば、比較的楽に両立出来たように思います。夕食の仕度が遅くなつて、多少亭主に空腹をがまんさせる事はあるにしても、極端に言つて、亭主はおつておいても死なない成人です。ところが子供となるとそうはいきません。たえず保護してやる人間を必要としているのですから……。よく病氣もするし、身のまわりの世話から、こまごました心くばりが要求されます。母親の一つの大仕事といえるでしょう。その大仕事と、更に欲ばつてそれ以外の仕事と両立させようとするのですから、かなりの悲壮感が伴います。まだまだ日本の社会は、働く母親にとつて居心地のよいものではないので尚更です。

しかし、いずれ育児は終るものです。子供は次第に独立し、

母親から物理的にも精神的にも離れていきます。女の一生を通じての仕事とは言えません。育児を終えてから後の人生を、どのように過すかが問題です。誰だってせみのぬけがらのようにもぬけのからになって過したくはない筈です。それ故に、育児・家事以外に何か自分を生かす仕事をもち、経済的にも自立したいと願う母親が居ても、誰もとがめる事は出来ないでしょう。

一人の女が結婚し、子供を生み、そして再び仕事をはじめようになつた一つの例として、自分の場合をふりかへて主な出来事を簡単な年表にしてみました。普段は、毎日／＼同じことのくりかえしの日常生活が続いているように思えますが、こうして一年一年をくぎってみますと、それは決して静止したものでないことがよくわかり、これは一つの発見でした。

S 34年 大学二年在学中に結婚。20才

S 35年 夫、発病（結核）して入院生活がはじまる。

S 36年 夫、肺切手術。学校の帰りに病院へ見舞う日々が続く。

S 37年 夫、退院後半年自宅療養して復職

私、学校を卒業して中学教師として就職

S 38年 長男誕生、中学教師を退職、わいふ第一号発刊する

S 39年 保育所づくり運動に参加、事務局を支持つ

S 40年 長女・次女誕生

S 41年 編物を習ったり、小学生に英語を教えたりする一方、

ひきつづき保育所づくり運動

S 42年 保育所の開設なる。早速3人の子供を入園させ、印刷

S 43年

会社をはじめするための準備をする。
大阪中津の世界長ビル地下二階の倉庫を改造して「三宝社」を設立する。私とパートの人2名。皆素人ばかりで仕事に慣れるので精一杯。採算とれず、さまざまな試行錯誤をくり返す。

S 44年

なんとか仕事には慣れたが、子供の喘息に悩まされ、仕事と家庭の両立に一番苦労する。パートの人が相次いで二人ともやめ泣きたい思い。夏休みの夫や弟の応援でやっときりぬける。秋になってやっと人がみつかる。

S 45年

長男が小学校へ入学。浜岡さんの転宅跡をゆずってもらい団地から引越しする。大阪をひきはらい、自宅の二部屋を仕事場にあてる。まだ学童保育がはつきり出来ていなかったのが、長男をカギつ子にするのではなくと恐れていたが、これでめでたく解決する。
三宝社から百合写植印刷㈱と社名変更、法人組織とする。

S 46年

大阪まで通っていた頃の通勤時間往復二時間分を、一時間は仕事、もう一時間を家事にふりわけける。急ぎのものは夜にも仕事が出るので、仕事の量もかなりこなせるようになる。私と常勤者1名、パート2名。
長女・次女小学校に入学。同じ敷地内に家を建て増し、会社と住宅を別棟にする。これで子供の遊び声にじやまされずに仕事に専念出来るようになる。

S 47年

S 48年

昼食の用意をして下さる方が見つかり、会社のみんな

おべんとうを持たずに出勤出来るようになり、大好評。お昼が楽しみ。私と常勤1名は変らずだが、パート4名になる。

こうしてみますと、①子供たちが大きくなって、体もだんだん丈夫になり、以前ほど手がからなくなってきた事、②職場と家が歩いて四五歩の所になったこと、③人が増えたこと、百合写植のみんなが、それぞれ仕事にキャリアが出来てきたので、私の負担が前より楽になったこと等、一時に比べると、だんだん悲壮感みたいなものは薄らいできたように思います。このまま、今までのようなゆるやかな上り坂を、いつまで続けられるかはわかりませんが、かなり色々な事を経験してきたので、少々の事では驚いたり、あわてふためいたりするようなことはないだろうという自信はあります。

近頃、紙不足が深刻で、小さな印刷会社があちこち倒産したような不景気な話ばかり耳に入ってきます。吹けば飛ぶような百合写植、この嵐を無事のりきれるかどうか、確固たる自信はないのですが、できるだけがんばってみます。

紙不足といっても、毎日の新聞には、うんざりする程折込広告が入っていますし、「あるところにはあるんだなあ」という感じですよ。『パルプの不足だ』、『いやカセイソーダーの品不足だよ』、『製紙業は公害産業だからな』、『いやこれはそんな問題じゃなくて、一種の政治的操作ですよ、印刷業界は小さな零細企業が乱立していて、組合価格も守られていないから、それを整理して系列化を進めようという魂胆らしい。』、『出版物の思想統制の前ぶれですよ』さまざまなうわさ話の一体どれを信じ

てよいのやら。

深刻に考えていたらノイローゼにでもなりそうなので、せっかく身につけた技術だけれど、別に一生印刷業にしがみつかなければならないこともあるまいから、と逃げ道も考えて気楽にかまえていきます。

幸い百合写植で働いて下さっている方々は、他にも特技をお持ちの方ばかりなので、もし万一方足りなく倒産とでもいうことにでもなれば、さしあたり今会社が使っている20坪ばかりの建物を、〇〇教室みたいなものに変身させるのも楽しいでしょう。英語・数学・書道・ピアノ・アートフラワーや料理教室、みんなの特技を生かしたら、結構一週間は埋まってしまいます。ペーシッターの希望もあります。やる気さえあれば道は開けるものと思っています。

でも、もしそうなたらわいふの印刷はお引受け出来なくなりますのであしからず…………。

又、昔のようにみんなでガリでもきりましようか？



母親が家で働くことについて

神戸市 浜岡 哥代子

編集部の鈴木さんから懐しくこわい電話をもらってから、もう三週間もたっている。「書かんらんわ」と思いながら遠藤周作の「死海のほとり」を読み、日曜日になると北に見える六甲の緑に誘われて登り、その帰り立寄った本屋の店頭でポーボワールの「娘時代」を買いました。一週間、あ、そうや、わいふ、わいふ、と思いつきながら、これにかじりつく。サルトルとの出会いから始まった「女ざかり」は案外一気に読めたのに、却ってその前編の「娘時代」はとつきにくい。すぐ前に読んだ遠藤周作のせいかな、日本茶の後でコーヒを飲む感じで読み進む内に、母親が働くことについて書こうという気持ちが段々なくなってきた。しばらく気が重い。ぞうきん縫ってみたい、扇風機を念入りに磨いてみたい、連休が多すぎるなと思いつ、も京都まで中国展を見に行き、主人の里の法事に行き、足早に秋ばかりが深まってゆく。

今日はギリギリ、さあ何としても書いてしまおうと意気込んでテーブルの上をきれいに片付けて座りました。

私の最近といえば全くのぐうたらで、午前七時、早起きの娘に声をかけられて一日が始まります。すぐ朝食の用意、といっても牛乳にコーヒを入れて色をつけ、玉子を焼いて、あり合わせの野菜か果物をちよい／＼と切るか洗うかするだけ。後は二

人の子供がパンを焼き好みに合わせてバター、ジャム等を通してつけて食べてくれる。私はその横で濃い紅茶を何杯も入れては飲み、やっと目を覚まし頭をはっきりさせる。八時十分二人が出て行くとすぐ朝刊を読みながら洗濯。九時に夜の遅い夫が起き出し、我々の朝食、又お茶を飲む。新聞やチラシを見て、今晩何にしようかな、何が食べたいかと詰らない会話をかわす。朝起きるなり、夕食のこん立を相談される男こそいい迷惑だろう。九時半すぎ、夫が出かけると後は私一人。私に何も特別の予定のない日なら、絶対せんなんということは唯一つ、夕方帰宅する家族の食事の用意だけなのです。

家事というものは、いくらでも切捨てられるもので部屋が散らかったり汚れたりして居辛くなったら不快でない程度に片づけ掃除する、着るものがなくなってきたら洗濯する、食欲を満たすために台所に立つ、アンケートで、家事は生きていく為の手段だから好きも嫌いもない、と言いきって居られる方のあったのが印象に残っています。が、まあ兎に角、私は暇があつてその暇に何をしようという当てのない日でもパツ／＼と家事を済ませてしまいたい方なのです。汗をたら／＼流して洗濯、掃除、買物をすませ、後は夕方五時から六時までガラ／＼すごす、そして台所でバター／＼と奮闘し夜の九時から大抵夜中の一時間までガラ／＼すごす。バターが少しとガラガラが大抵、こんな毎日を送っている私が旦で、育児、仕事、家事と時間に追われつつ走って来たことを思出して書いてみます。

私は今まで丁度十二年余り、子供相手にオルガンとピアノを教えてきました。この仕事をしながら、私は自分が働いている

という自覚を殆んど持っていなかったように思います。ただこどもが大好きで、それも子供を可愛がるという母性的なものではなく子供に興味がある、子供について実に面白いものだと思ひ、色々違った子供に接するのが好きなのです。同じことを話しても一人／＼違った反応を示す。同じ曲でも全然ちがった音を出しそれぞれの雰囲気で演奏する。特に楽器は嘘がつかない。普段おとなしく内気だと思つていた子がピアノの前では驚く程勝負な弾き方をする。弾き方だけでなく音にもそれが表われるし、楽符との取り組み方が又十人十色で興味深い。

それにもう一つ楽しいことはお喋りだ。学校の先生でも母親でもない私のような存在に対して子供達は案外飾り気なく自分をさらけ出すことが多い。楽器店経営の教室にいた頃は別として私が自分で教室を持つてからは五人を一グループにしてオルガンの前に座らせていた。まずはじまりの歌を歌う。この時私はいつも一人／＼の顔を見る。とても緊張している子もたまにはいます。五人の内いいとこ一人、オルガンにもたれはつとしたようにあくびしている子が一人、後の三人は隣りの子と笑い合つたり道具をさわつたり、でも歌だけは一番威勢よく歌ってくれる仲間です。私が黙らせようとしても話しかけ話しかけ、おこつても／＼ついて来るのはこの連中です。

こんな訳でどうにもやめられなくて一気にこの仕事を私は今日まで続けて来ました。結婚前、精薄児の施設に勤めていた私は、どうしても子供の体臭がたちきれなくて、結婚二カ月目、丁度募集していたヤマハ音楽教室の講師に応募したのがこの仕事のはじまりです。長男が生れて仁川に移り、自分の家を教室

にしたいという希望から途中でカワイ楽器の教室にかわり、二人目の出産後、楽器店からはなれて自分の教室にするまで、形はいろ／＼変つたけれど、その間の十年間に私は数え切れない程の子供を知りました。しかも「わいふ」を知り、良き友人を得、そして子供を二人育て乍ら、自分の仕事を続けてこられたのは、時間的に融通が付き、家で出来るという点で母親の仕事としては随分恵まれていたからでしょう。仕事の内容も、大声で歌つたり子供と喋つたりするのが好きな私には向いている様で、とりたてて不満は何もありませんでした。どうにも張り切つて大声を上げる気がしない日や、しんどくて高木さんの家に転り込んで「今日教室休みます」と貼り紙してもらつた日もありました。大抵の毎日、午後一時、子供たちが次々やつて来て狭い玄関が小さい運動ぐつで埋めつくされると気持ちがしゃんとして、通称オルガンの教室と家族が呼んでいた、部室で子供に囲まれるとやはり家事や育児では殆んど味わつたことのない、充実感を私は持つていたように思います。

子供が生れると出張を少なくして自宅で教室を持てたのも幸いでした。仕事と子育てが両立出来ていいねと周りから言われ、私自身もそう考えていました。子供が生れてからも、家での教室の時間には子供部屋にはり込み、後は泣いても知らん顔、私は自分の子供がわあ／＼泣いていても気にしないで教室の仕事が出来るといふ誠に好都合な才能を持つていました。というより、ピアノやオルガンの音、子供達の歌声が、息子の泣き声を忘れさせていたのかも知れませんが、その内息子の方もくたびれ損に気付いたのか、空腹とおしめのぬれた時以外、殆んど泣

かない、一グループ50分、休憩10分という、教室のリズムを自然と飲み込んでくれて、調子よく教室と共に育ってくれました。どこへも遊びに行かなくても子供達がたくさんやって来て待ち時間に結構遊んでくれる。眠くなればピアノの裏側の部屋に行きタオルをすって眠る。出張教室の時は、近所の方に預けてもらったり、少し大きくなると連れて行ったりもしました。大抵の教室は幼稚園やお寺を借りているので都合でした。川西市の田舎の教室等は学校の講堂を借りていて、こ、は息子のお気に入り遊び疲れると広々とした講堂の舞台で眠ったこともありましたが、勿論、こんな母親本位の育て方をした弊害は少し大きくなってから、いろんな形で私を悩ませることにはなったのですが、とにかく私の側からは周りの人達の多くの協力もあって何とかうまく両立出来ているように思っていました。

ところが四十年、二人目を出産してはじめて育児と仕事の両立の困難が私にも現実問題となって来たのです。長男の時のようにうまくやれる積りで、楽器店をやめ、家の教室だけにしたのにだめでした。健康で手のか、らなかつた長男に比べ、この娘はしょつ中熱を出し、つい／＼手をかけすぎたのか、仲々、乳児期の生活のリズムがつかず、その上スムーズに教室にとけ込んでいた上の子までが逆戻りでダダをこねると言う困った日が続きました。ついに私は迷った末、保育所探しに踏切ったわけです。その頃、仁川にはY保育所という三才未満の乳児保育所とキリスト教系の保育園が一つあったきりで、私は歩いて20分もかゝる保育所に下の娘を満10ヵ月で入所させました。

初めての日泣き叫ぶ声を後に走って帰り夕方五時すぎに迎え

に行くと、どこにもいない。あまり泣いて他の子に具合悪かったらしく「おフロ場にねかせといたんですよ」と言われ、のぞくと脱衣室の隅のベッドに、泣き疲れた、はれた顔をして眠っている。私はわあ／＼泣きたい心境でした。こんなにしてどうにか慣れてくれた保育所なのに、又困ったことが出来たのです。私の仕事は子供相手だから午後一時位からはじめ、終るのは、六時か七時になる。保育所は、五時迄だから仕方なく最後のグループの時間をずらせて、保育所へ迎いに行く。往復40分。帰るなり又子供部屋にほり込まれる娘は、丁度遊びから帰ってハラペコの兄貴に、欲求不満をぶつけている。散らかそうがけんかしようが、仕事中は無視する主義を通して来た私もさすがいらいらして来て、こんな位なら、遠い保育所へ連れて行く時間の方が勿体ない。家で午前中、思いっきり遊ばせて午後人に預けてもらおうかと考えたり、あれこれ実に迷いました。

丁度そんな時に仁川保育所を作る会が出来たのです。私も早速運動に参加しました。一年半程後、保育所はやつとたちました。娘もこの保育所に移りました。でも私の仕事は一般の保育所の保育時間とのずれが余りにも大きく結局、娘の保育所生活は失敗だったようです。

三才を過ぎやつと筋道立てて自分の考えを話せる様になった時、「わたしはオルガン教室の邪魔しないで見てるからお家においといて」と言い出した時、私はその通りにさせました。昼食の時間を少しおくらせ、夕方七時頃までお腹が持つように工夫したり、保育所から五時頃帰ってきたお友達に來てもらって一しよに遊ばせてもらったり、勿論「邪魔しないから」と宣言し

た娘の方は仲々その通りにはゆきませんでした、私は家で仕事をもち、二人の子供を育ててみて、外へ働きに出ている母親と家で仕事をしている母親とは随分いろんな条件が違っていることに気が付きました。一番大きな特点是、子供に自分の仕事をしている姿を見せられるということです。

一才の子でも三才の子供でもその能力に応じて母親の仕事を理解してくれるということをおは知ったように思います。

それと同時に我々の方でも子供の求めているものをしっかり見て、それが与えられるものなら与え、だめな時には、はっきりその理由を示してやる必要があるのではないか、その原則さえふまえていれば後の障害は、何とか乗りこえられるんじゃないかと思うのです。

こんな風に行きあたりばったりで育ててきた二人も十一才と八才になり、アンケートで誰かが云われている様に私と子供の関係もタテからヨコに変ってきたことをこの頃私もつくづく感じます。つい最近、息子が「給食のガウン、○君いつもきれいにアイロンかけてもらってるんや」と云ったのをきっかけに私は音楽教室の仕事をし乍ら、切捨ててしまったことがたくさんなくさんあることを話してみました。勿論アイロンかけも惜し気もなく切捨てたものの一つ。(私は子供のものには殆んどアイロンをかけずにすごした。今でもとり返したい程の気持で切捨てたものの一つは、家に帰ってきた子供に、おかえりと言つて迎え、一しよにおやつを食べたかったこと。話したいことや、おこりたいことがいっぱいあったかも知れないのに、オルガン教室の戸をちょっとあけて、ママただいま。私はうなず

いてやるだけだったもの。——でも息子は、そんなことには余り関心ないようで、「へえ、ばく幼稚園の時いつも○○君とこでおやつもらってた。けど、ピアノよりオルガン教室の方が、ずっと面白かったなあ」と云つて笑っている。今私は週に一日か二日、ピアノだけ見えています、子供をピアノの前に座らせて、作曲者が何十年も前に作った曲を、その通りに弾かせることが、そんなに意味あることだろうか等と時々迷っています。

羽仁説子が著書の中で、「私は上衣のボタンがとれたまゝ、何日もすごしたけれど、それよりもっと大切なものを母からもらっていたから、いつも幸せな少女だった」という意味のことを書いています。10年間、やれ教室だ、育児だと走り廻り、ボタンもつけてやれず、もっと大切なものも、よう与えずに、すんでしまったのですが、子供の手もはなれた今、皆が出かけてしまった家の中をウロウロ、「何しようかな、今日は——」等と考えている自分が、時々おかしくなります。

大阪市 篠原 広 祐

鮮明に夏花を挿しぬ 無縁墓地

金沢の町が車窓を走る 卅年の昔を残し

夏の日の腕時計 せつかに刻む

日々良いお天気で 幸せする

母親が外で働くことについて

奈良県 渡辺 富子

子供の頃よく学校ごっこをしました。

「はい、並んで。」

「皆さん、勉強の時間ですよ。」

私は近所の小さい子を集めて、お山の大将になり、いつも先生を演じていました。その頃の「私は先生になりたい」という願望が、いつしか「私は先生になるのだ」という強い信念に変わっていました。その感が一層強められたのは、教育実習に行つて、実際に子供に接した時でした。理屈抜きで私を夢中にさせました。

その頃、「共稼ぎ絶対反対」という、叩けば「カーン」と音のする程の古めかしい信念で固まった今の夫と交際しておりました。会う度に「勤めたい」「駄目だ」と論じ合いました。それでも、私の熱意に押されたのか、「仕方ないな」という歩み寄りを得たのです。

いよいよ結婚。共稼ぎは快適でした。朝二人揃つて家を出てお互いの仕事の事など話し合うのです。雑踏の中の二人は、働いているのだという誇りで（夫には女房に働かせているという屈辱だったかも知れませんが）胸がふくらんでいました。

「はい、並んで。」

「皆さん、勉強の時間ですよ。」

と幼い頃やっていた事が、実現したのである。自分の描き続

けていた教師とは、子供と共に笑ったり、泣いたりするのだというロマンティックなものでしたが、実際に任された子供は、一ときとてじつとしてない、生の感情をむき出してくる知恵遅れの子十人の特殊学級でした。毎日が体と体でぶつかつてゆくより他のない子供達で、ハプニングの連続でした。ろくにカリキュラムもなく、一人一人に合わせて作つてゆくのです。「仲よく遊ぶ」が学習目標の子、「余りのある割り算」が目標の子、個人差のはなはだしい十人。普通学級の平均的授業の進め方は全く通用しないのです。普通学級では、お客さん扱いで、一言も口をきかなかった子が、私の学級に来て、急に多弁になり、長欠の子が、二年間皆勤になるなどが、私の楽しみでした。家に帰つても家事はありましたが、二人きり故片手間にいけ負担にも感じませんでした。夫は自分の仕事（建築設計）私は私の仕事の話をし、いつも二人の間には、活気が満ちていました。

ところが、二年目に長男が生まれました。あどけない瞳でじつと私を眺めているのを見ると「勤めなんかどうでもよい。この子を私の手で育てよう」と我が子に夢中で、学校のことはすっかり忘れてしまっていました。けれど、産休明け近く、豊中市役所から「保育所に欠員ができたから、預かりましょう」と言われたのです。

「矢張り、勤めるわ。」

「我が子と、他人の子とどちらが大切なんだ。」

と、また夫と大論争。でも経済的に負い目のある夫は、しぶしぶ承諾してくれました。

其様子は快適でしたとは、残念ながら言えなくなりました。朝早く子供を連れ、ミルク、弁当、おしめを持って保育所に行き、夕方遅く汚れたおしめと共に子供を連れ戻す日が続くのです。

よく風邪もひきました。ぐんと冷え込みがこたえる一月頃だったと思います。研究会があり、とつぷり日の暮れた七時頃、連れに行くと、「熱がある」という。かかりつけの医者に一時間近く待たされ、診てもらう。すると「中耳炎になっているから、耳鼻科に診せなさい」といわれる。そこには、バスでないと行けない。時計を見ると八時半になり、風がひゅうひゅうと吹き、いつしか雪も舞ってきている。すっかり赤ん坊を抱きバスを待つ。吹雪の夜でバスは定刻になっても来ず、頭からすっぱり毛布をかぶった赤ん坊が、熱っぽい顔をして「ぎゃあぎゃあ」と泣く。吹雪は、容赦なく赤ん坊にもかかる。バスは仲々来ない。道が真白になって、もう不通になるのではないか。私は「ごめんね、ごめんね」と赤ん坊と一緒に泣いていました。どれ程待ったでしょう。遠くにバスのぼうつかすむ明りを見た時は、「来たよ、来たよ」と大声で泣いていました。赤ん坊は、もう泣く元気もないのか息使だけが荒々しく聞えるばかりでした。バスの窓から見える家々の暖かそうな明かり、「ああ、勤めを退めようかな」と真剣に考えていました。

それでも、子供の意志表示もない乳児時には保育所通いもスムーズに行きました。勿論私は、勤め、家事、育児でたくさんで、毎晩帰りの遅い夫が、仕事の話をしても、相槌をうつものも気怠く、十二時頃床につくとすぐ、寝入ってしまう、以前の様な活気は、二人の間から消え失せていました。子供も三才近く

になると、保育所通いを嫌がり、毎朝道に座り込んで歩こうとしなくなりました。保育所には、八人程同年令の子がいて、情緒不安定になるのではないかと気になりながらも、遊び友達がいって、社会性も養われ、自立心も芽ばえるのではないかと、良い方に解釈することで、自己正当化していたのです。けれど、子供にしてみれば、母親と一緒にいたかったのでしょう。日々萎縮し、一人ぼつんと絵本を見たり、テレビを見たりして、ひたすら迎えの私を待っているとの事、これには私も参りました。幼児の内から、集団生活をさせると、外向的な子は、集団の持つ良さをどしどし吸収して積極的に逞しさを増してゆくが、長男の様に内向的な子は、萎縮していくばかりのようです。又々夫と「やめろ」「いや続けたい」と大論争の毎日でした。

そんなある晩、夫が改まった顔をして、「おれ達は、ここには、子供を見てくれる知人も、親戚もない。保育所だけが、唯一のものだ。」

風邪だ、ひきつけだ、仮性コレラだと、その度に校長先生に「また子供が熱を出しました。休ませて下さい」と言いに行く辛さ。物を相手にする事務なら、仕事がたまれば、徹夜してでも、片付ければよいだろうが、子供相手の仕事故、私が休めば他の先生に迷惑がかかるし、第一子供にすまないと思うのです。それで、子供の病気が続く時には、私の田舎の母に電報を打ち、福井からはるばる息せき切って出て来る年老いた母も、「毎日が、ひやひやだよ。いつ呼び出しが来るかも知れないものね。スツケースにいつでも出られる様、用意してあるのだよ。」と苦笑していました。

そんな事が脳裏をかすめ、又「やめろ」などと、かしこまって聞いていました。

「今、おれとお前の、どちらが一人しか働けないとしたら、社会的にも、おれとお前のどちらが退める方がよいか、よく考えてみ。」

この言には、私も一言ありませんでした。

その内、奈良に転居することになりました。校長先生も、転勤を勧めて下さり、私自身も我が子を持って、親の立場から子供を眺めることも出来、本当に教育の面白味も分かり、油が乗ってきたところですが、涙をのんで、勤めることをあきらめました。知恵遅れの子供達の教育は、カリキュラム、教育の環境、一般の人達の理解などもさることながら、私と子供達とのかかわり合いしかなければならぬか。必死になり五年がかりで何とか呑み込めてきた時、気づいてみれば、家の中は散らかし放題、我が子を自閉症的性格にまで追いついてたのです。夫と私とは、いくら頑張ってみても、働くメリットは夫の方に軍配が上がるのです。

独身時二年、結婚して二年、母親となって三年の教師生活を退めたのです。幾度も挫折しかけたながらも、七年間教壇に立てたのは、私は仕事がとても好きだったこと、職場に先輩のママさん先生が多くいて励ましてくれたこと、しぶしぶ認めてくれた夫が、友人に「共稼ぎはいいものだ」と勧めるようになるまで変化したことなどが原因だと思います。

現在、長男は小学二年、三才の長女、八か月の次男と、三人の母となりました。後二人の妊娠時は、長男の時の様につわ

りでラッシュ時幾度も途中下車して吐いたり、臨月になっても体育をしたり（出産前日まで勤めました）せず、お腹がはれば横になり、実にゆったりした気分でお産しました。

今は、三人の子供の世話に明け暮れしながら、ひたすらプロの主婦になりたいと願っています。妻、母、自分自身の三つの柱を持ったプロの主婦になりたい。夫が持ち帰る社会のいぶきを「ふーん」とだけしか答えるのではなく、私の方からも話題をぶつけていける妻。美味しいぬか漬も作りたい。学校の先生の下請け的教育なんかせず、家庭でしかできない教育を目ざす母。そして私自身。勤めをやめて四年間、近所の小中学生を集めて学習塾をやっています。学習塾といっても、普通のものと異なっていて、一日に四、五人ずつ、一人一人の能力とペースに合わせて、子供達が納得いくまで、時間を無視して一緒に考えてゆくのです。テストで三十点しか取れなくて自信喪失している子、どうしても「割合」がのみ込めない子、何らかの意味で痛みを持っている子供達が集まってくるのです。私は、それらの痛みをすべて癒して上げることが到底できませんが、少しずつ和らげられたらと願っているのです。

今の処この塾が私の生活のへそなのです。私の一日は、子供達と勉強する時間をへそとして動くのです。朝、主人、長男を送り出してから、二人の幼児の機嫌を取りながら、数学の問題を解いたり、英語の文型カードを作ったり、単語絵を描いたりする。子供達の親へ、学習の様子、子供達の態度などを連絡帳に記したりする。午後は二人を連れて散歩しながら、今日やってくる子供達一人一人の顔を思い浮べ、英文を口の中で、もそ

もそ言ってみたり、数学の図形の証明をどうしたら分かってもらえるか考える。それから夕食の下ごしらえし、おしめを洗って、下の子供を寝かせて、へその時間を作るのです。文部省の通信教育があると知れば受けてみ、英語の検定試験があると聞けば、学生の中で、おばちゃんか胸をときめかせて受けてみるテレビで通信講座をやっているのを見れば「お母さんが見るから消さないで」と固くなっているいきつつある頭をへそのため動かそうと努めています。

家庭が私の職場です。薄化粧ぐらいして、Aラインよろしく妊婦服まがいの服ばかりでなく、時にはウエストをきゅうとしめ、ツツカケばかりでなく、ハイヒールもはき、自分で緊張を作るのです。母親が外で働くことは、自分を生かすのに、自立するのに最もよいことだとは思いますが。社会に出て働ける環境にある人は、どしどし働いて欲しいと思います。私に「その環境作りに全力を尽したか」と反問されれば、「はい」と答えられる自信はありません。矢張り甘えがなかったとは言いい切れなからです。

けれど家庭に入っても、自分を生かすことはいくらでもあるのではないかと思うのです。すっかり安定した長男、全力投球で仕事に打ち込んでくれる夫の姿を見ながら、ああ、いつになったらプロの主婦になれるのやらと、今日も子供をあやしなから、Aさんのための応用問題を作っているのです。

母親が外で働くことについて

大阪府 土井 邦子

母親がと、ことさら言わずに、働きたい女性は男性と同じく自然に働ける様にならないものだろうか。結婚する時、相手を選んだ様に、選んで主婦専業の人や、いろんな人がいてもよい筈だ。結婚したからといって家事が苦手な人も少なくないと思うので。でも、主婦という形にはまって生きるのは、なまけ者には、楽だから、少し位の苦痛はがまんしているというのも、本音だ。

ところで、何の為に働きたいかと自問した時、一つ考えの変わった点がある。外の風にあたりたいとか、子供とベッタリしたくないからとか、いろいろあるのだが、老後の為という事は考えていなかった。この場合は、老後の生活を豊かにというより、食べていけるかどうかの事である。従姉に、二十年近く保育所勤めの人がいるが、恩給がつく様になる迄と、二人の子供を別の保育所に預けて頑張っている。私は彼女から、仕事に対する情熱を余り感じた事もなく、ごく最近も、やっぱり子供は母親と一緒にの方が良いというような話を聞き、正直、彼女の苦勞は察しながらも、がっかりした。「恩給まで」という言葉に、私は不純なものを感じて仕方がなかった。保母という仕事が、特にそう思わせたかも知れない。

でも、今年の敬老の日前後に、老人の悲しいニュースが、何

と多かつた事が……はじめて私に老後の事を考えさせた。そして、一人息子である夫と、私が姑の世話もせず、のんびり暮らせているのは何故か考えてみた。姑は、息子が六才の時、夫を亡くし、それから区役所で定年迄、勤めだ。後に再婚したが、やはり公務員であつたから、今は二人共、恩給で、のんびりくらししている。私達の方が生活が苦しいと見えるらしく、何かと助けてもらっている有様だ。

夫は子供の頃のカギっ子の生活が忘れられず、母親が外で働く事は反対なのだが、私もいつの間にか、マーケットのコロツケで育つたような夫に同情している事もあつた。でも、一人息子に淋しい思いをさせ乍ら、頑張り続けた母の方がつらかつたに違いないのだ。それは全く未亡人が子供をかかえて、食べていく為の仕事であつたから。

現在は子供に負担かける事なく、好きな旅行もできるし、私達も重荷に感じる事もなく、おかげで、いがみ合う事もないわけだ。

従姉の「恩給まで」という言葉も、不純だなんて言えなくなつてしまつた。

働きたいという意欲を私になくさせていたものは何だろうか……夫の反対もあつた。しかし何といつても、ぜひ生かしたい技術が何もない事だ。だから、反対を押し切つてまで、出る勇気がない。本当は、我が家の経済事情を考え、パートでも何でも、まず、収入を増すことをやってみたら、その中から、仕事の楽しさなども、みつかつたかも知れない。ところが、負け惜しみでなく、お金が欲しいから働こうと思つた事がなかつた。世

間という、安月給はいくらかも知らないが、夫も安いと認めているし、毎月五人が食べるだけの生活だから安いに違いない。けれど、小さい時からの貧乏ぐらしで、ぜいたくの味も知らないし、着る物は夫のものの以外、更生品や、はぎれを利用したりするし、子供が小さいから教育費も、わずかだし、今迄はお金が必要という事もなくきた。いつまでも続かないだろうが、下手なやりくり慣れてしまつて我が家はマイペースで、流行にも縁が無い。

私が外で働こうとする時、休日も問題だ。デパート勤務の夫は日曜・祝日は絶対に休めないし、子供達が学校へ行きだすと完全なすれ違いになる。今は私がお家にいて、両方巧く保つていけるけれど、日曜と木曜、休みたいなんて虫の良い職場はないだろう。でも、それはぜいたくというものかしら。

今私は、手に技術のないのが、くやしくてならない。後、三年位は家にいるつもりだから、その間に何とか、勉強しようと思う。それは、直接仕事につながらないかも知れないが。

大きな目を見開いて考えようと思つても、自身、母親となつて働いたことがないので、狭い考え方しか出来ない。いろんな問題、かかえ乍ら仕事を立派にやっている人達つすばらしいなあと思ひ、同時に主婦業にはこりを持つて家族に心くばりをして人達もすてきだと思う。どつちつかずの自分がいらだたしくてならない。

母親が外で働くことについて

吹田市 山田 よしみ

「わいふ」十周年記念特集①の発行を心よりお慶び申し上げます。

ずっしりと重い特集号を手にして、編集部のお努力を痛感させられました。そして、十年の歴史を築いてこられた会員の皆様の情熱と愛情を思い、感動の波が私の心を占領してゆくのを止めることが出来ませんでした。

実は、アンケートを記入した直後、テーマ原稿として拙文を綴っておいたのですが、我家で眠らせておりました。特集号を拝読してから読み返してみますと、何か手遅れという感じがして、ボツにせざるを得ませんでした。申し訳ございません。かわりに、拙い詩を書いてみました。働く母親であった時の気持ちを思い出しながら……。

働く母よ

お母さん

外で働くお母さん

夫の愛

子等の理解

両親の恵み

それが

あなたを先駆者として
世に送り出した

お母さん

外で働くお母さん

あなたの理想

あなたの実践

あなたの奉仕

それは

人類の幸せを

導くエネルギー

お母さん

外で働くお母さん

何も心配せずに

頑張ってほしい

あなたの小さな不安

それを

勇気づけてくれる

わいふたちがいるから



第10回記念集会和バザーへのおさそい 併せてカンパのお願い

集会和バザーの日時・場所

10月28日(日) AM11～PM 3 話し合いAM11～PM 2・バザーPM 2～3の予定

仁川団地集会所

集会的テーマ

○特集①②を中心にしながら。

○次のテーマについて

○第10回記念集会和バザーは上記の通り開きます。多数ご参加下さいますよう、お待ちしております。

例年と多少異なる点がありますので、お気をつけ下さい。

①ご出席の方は、会場準備の都合もありますので、前もって、高木宅までおしらせ下さい。(TEL 0798-51-4360)

②集会是午前中から始まりますので、各自簡単な昼食をご用意願います。(駅前や、仁川団地の近くにパンや牛乳を売っている店があります)

③ことしのバザーは、規模を小さくして、当日出席者の持ちこんで下さった品物だけの範囲で開きます。尚当日の時間の節約のため、持って来て下さる品物には各自の判断で適当な価格(50円、100円、150円、200円……)をおきめになり、白紙によくわかる様に値段を書いて貼りつけた上で出して下さるようお願いいたしておきます。

* * * * *

カンパのお願い

○日本列島を物価高騰の嵐が吹き荒れる昨今、おたがいに生きづらいことです。

わたし達、共有の広場「わいふ」の台所もその日暮らしの悲しき、心細い気持ちですしております。

会計報告を見て頂くとお判りのように、わいふ発行所、高木さんのご好意により極端に安い印刷代(紙代も含む)をもってしても、全く余裕のないぎりぎりの状態でして、会費の前納分でもって辛うじてやりくりつけているのです。しかし折からの紙代の値上げや、特集増頁の発行などに直面しますとお手あげの状態に追いこまれてしまいます。

例年、記念集会和併せて開くバザーでの収益金は「わいふ」にとりましては、不可欠の財源確保の道でしたが 117号でも述べました様に、この数年間の実績をみました時、送って下さる方の暖かいお気持の深さや、郵送料の高負担に見合うだけの好成績を上げること叶わず折角のご好意が充分生かされない無念さを味わって参っておりました。にも拘らず、バザーで得ている収益位は、是非欲しいものですから、編集部に近いメンバーで話し合いました結果、ことしはバザーそのものは規模を小さくして、遠方の会員には出品は乞わず、その代り、大変身勝手なお願いですが、皆様から広く、現金もしくは切手でのカンパ(1人 100円宛位)をお願い出来ないものかということになりました。いかがでしょうか。

出費のかさむ今日この頃、本当に言い出しにくいことなのですが、バザーへの品物を送って下さったと思って、その郵送料なりとも、カンパして頂ければ、大変ありがたい、というのが偽らざる気持ちです。

一人でも多くのご協力をお願い申し上げます。(切手でのカンパの場合25円切手が好都合です。)

編集後記

❖女心が男心か、このところ、あまりすっきりしないお天気がついていますが、晴れ間をぬって運動会の喚声が聞えて来ます。皆さんお元気ですか。118号に続いて119号を予定どうりテーマ原稿で埋める事ができ、とてもうれしく思っています。アンケート特集と合わせ、ぜひ読後感をお寄せ下さい。

❖アンケート特集をお読みになって、既にお気づきの事と思いますが、28頁と29頁の本文が入替っています。担当しました私の大ミスで大変な事になってしまいました。穴があれば、いや、たとえなくても掘ってかくりたい気持です。ご投稿頂いたA-31、A-32、A-33さんをはじめ、わいふの皆さんにご迷惑をお掛け致し申し訳ありません。この様な校正ミスの場合、お菓子を持って担当者があやまりに行くそうですが、お名前がないのを幸い？（ゴメンナサイ）誌上でお詫びします。どうぞ、よろしくご訂正下さい。

❖「カンパのお願い」にもありますように、現在わいふの会計は大ピンチです。先号にて予告の特集増ページ分の価格については、9月例会での話合いの結果、118号は本誌200円＋送料55円で実際には普通の号より130円高くなっていますが、整理の都合上、これを一カ月分の誌代（送料込）とみなし、既にお送り頂いています。誌代より差引かせて頂く事になりました。例えば120号まで誌代を送って頂いている方は、一カ月分差引いて119号まで納金済となります。この計算の結果、誌代切れの方には今月号の封筒にその旨記していますので、右の次第、会計報告と合

せご了解下さいまして、ご送金下さい。

❖今月号はテーマ原稿集となりましたので、お忙しい中を既にお送り頂いています。稲垣さんの「書くということ」、土井さんの「ひとりの女として」、津堂さんの「ある青春」、上野さんの「PTA会長奮戦記」、杉本さんの「土地騒動」等は、次号より順次掲載させて頂きます。お楽しみに……。

❖会員名簿は、まだお送り頂けない方があったり、お知らせ頂いた内容もまちまちなので、住所、名前（備考として、わかっている方は年令も）位でまとめさせて頂き、来年一月頃発行の予定です。今暫くお待ち下さい。

❖次のテーマを目下考慮中です。日頃お考えのテーマがあれば、ぜひ編集部までお知らせ下さい。

❖十月三日付の朝日新聞に評論家の樋口恵子さんもおもしろい事を書いておられました。お読みになった方も多いと思います。が、要するに「横暴亭主はダメなおばあさんをつくる」という話です。世の夫達は妻が仕事を持って外へ出るといふ事でなくとも、例えばサークル活動やPTAなどで外出する事に対しては、例え「顔をしませんが、妻が自分以外のものに目を向け、家庭以外の世界を持つ事がおもしろくないのです。平均寿命の長い女の老後は、夫との年令差も加わり、未亡人になる確率大ですが、この老未亡人の幸福感や充足感はその人自身の友達の多さ、付き合いの深さに比例するそうです。友達付き合いや自分の世界のない老女の晩年はやたらと心が淋しく勢いイヤ味なおばあさんになりがちだという事です。夫の顔をうかがいながら外出する、このような事は多かれ少なかれ殆どの家庭で経験

されているのではないでしょう。アンケートを読んでいても、事の善悪は別として、ご主人の影響の大きさが感じられます。

愛ゆえとしても妻を家の中にとじこめる事が、将来イヤ味なおばあさんとして知られる様な状態に追いやるとすれば、夫としても望むところではないでしょう。それとも後は野となれ山となれ、お先に失礼：でしょうか。願わくばこの記事を一人でも多くの夫達が読んでくればいい、のですが…。

✧先日、仕事やわいふの編集を休んで（高木さん、後藤さんスミマセン）主人と二人で京都の大原へ行って来ました。紅葉にはまだ少し早すぎましたが、三千院、寂光院とまわり、久しぶりに自然を満喫しました。必要にせまられてと違い、全くの楽しみみの為、夫婦二人で外出したのは何年振りの事でしよう。子供達は二人だけで外出するのが珍しく、又そんな親の姿がうれしく「心配しないで行ってらっしゃい」と頼もしく送り出してくれました。若いアベツクの様子に手をつないだり、景色そっちのけで話に夢中といった甘い雰囲気は、残念乍ら中年の？夫婦と致しましては望むべくもありませんが、まあ楽しい一日を過す事が出来ました。子供を置いて夫婦だけで外出する、外国映画ではよく見る光景ですが、私達の生活にとっては、ちょっとしたニュースでした。我が家はこうでなくてはいいのだから」と思っていた生活様式も、時と共に変化しますし、何かのキツカケでやむをえず生活を変えなくてはいけなくなつた場合でも、お互いの助け合いや努力で、以前とは別の新しい道が開けていく様に思えます。アンケートに表わされた77の家庭、顔がちがう様にその生活様式、生き方の違いはありますが、い

会 計 報 告

	7 月	8 月	9 月
			記念増ページ号
前月残高	50,758	30,983	34,908
収 入	10,750	35,625	13,200
支 出	30,525	31,700	36,380
印刷代	25,000	25,000	25,000
送 料	5,525	6,700	11,380
差引残高	30,983	34,908	<u>11,728</u>

（9月末日現在）

ずれも真剣に営まれています。それ／＼の違いは又、多くの可能性を含んでいるという事でしよう。まだ／＼先の長い私達、お互いガンバラナクツチャ!!

✧10月28日の記念集会、多くの方にお会い出来るのを楽しみにしています。ぜひご出席下さい。

（鈴木記）

毎月一回十日発行

原稿・誌代の送り先

〒665 宝塚市仁川宮西町1の72

「わいふ編集部」

発行人 高木由利子

発行所 わいふ発行所

振替口座番号 神戸19515

印刷所 百合写植印刷有限公司

誌代 一部 百円(送料25円)

原稿〆切 毎月二十五日(以降翌月まわし)